



岐蘇林

目次

- ▲紀行
白馬登山の記
駒ヶ岳行
- ▲隨筆
稽程一千日
思出の記
- ▲通信
學校便り
寄宿舎便り
會員消息
運動會記事
- ▲雜報
數件

大正三年十月二十五日 第六拾號 (日十月七年二十四治明) (日五廿月每定) (日可認物便郵種三第)

謹告

拜啓今般安藤校長殿には長野縣林務課長に御榮轉被成候に就ては先生御在職中の功勞に酬ゆる爲記念品を贈呈し聊か報恩の微意を表し度候間何卒御賛同應分の御寄附に預り度此段以誌上得貴意候也

追て締切期限は本年十二月末とし御送金は可成振替に依られ度口座番號は『東京一七六〇〇』に御座候
大五三年十月

木曾山林學校校友會
卒業生各位

謹啓秋冷の候各位益々御健勝之段奉大賀候 陳者不肖曩に乏を木曾山林學校に承け同時に校友會長の任に就き候以來多大の御同情に接し奉萬謝候未だ之に對する責務を全うせず御厚情に酬ゆる處無之常に遺憾に存居候折柄今回突然官命に接し長野縣技師に逆戻り林務課長拜命致し十月七日着任仕候就ては今後は縣林政の爲全力を盡して奮闘可致候へ共我が蘇校の發展に就ても乍蔭微力を致し度存念に御座候間一層の御厚誼相願度先は轉任の御挨拶旁々平素

の御芳情に對し御禮迄如此に御座候

敬具

大正三年十月十日 安藤時雄

各位

肅啓時下滿山錦を飾るの候に相成候處各位益々御清穆の段奉大賀候陳者小生儀今般先輩安藤時雄君の後任として木曾山林學校校長被命候就ては學校長として將た又校友會長として乍不及盡力致度き考に御座候間將來益々御援助の程偏に奉願上候先は不取敢紙上を以て新任の御挨拶まで如斯に御座候 敬具
大正三年十月 七宮純雄
各位

紀行

白馬登山思出の記 (第二回)

珍竹山人

二、出發

最初の登山計畫は前述の理由にて一時延期する事と定め七月二十九日大町集合の宿所へは『トザンエンキンタシツレイ』の電報を打ち林務課員中山氏に通報したのである定めて此電報を受取られた時は失敬なと思は

長野市南區町巳三番地 田中彌助

長野縣四筑摩郡福島町二八九番地 發行所 鷹澤書店

れたであらう、一行二十名とやらは諸君に對して自分の加はらない事が或は方落ちとなりはしなかつたかと思つた然し此電報に依り自分の御託を早く申出たのである若しも無斷約束を違反したらうれこそ無禮の奴と云はれたであらう、かくて恩師佐々木博士一行は八月四日歸京致され之も首尾克く送り立て、自分も重荷が下りた様な氣がしたが本年は夏季は實習後の休業日廿日間と云ふ規則改正の始めに最早半ばも過ぎ去りたれば登山計畫は如何かと思ふた此儘葬るも遺憾であるが未だ出發の勇氣が出ない此度は他に約束がない丈けそれだけ自由の發展を企て様と決心した、

然し尙ほ茲に自分の前に横はる難題があつたのであるそれは六月末以來我山林學校寄宿舎の湧水事件である百有余名の舎生始め職員其他の飲用水は全く水源涸渇と水道装置不完全故障百出の爲め水攻めに遇ふた元來我校舎の風攻めは評判である之は地の利を得なかつた之は位置撰定の上に誤があつたのであらうが水攻めにならうとは御互も當局者も想像外であつたであらう之も地の利宜しきを得ない結果である又根本的利水法が完全に實行せられなかつた罪である今年の如く木會も九十度以上の暑さ世間並みの土用に入尙ほ水に不足しては舎生の不平不満足も無理の無き話である舎生の數回會

合して之が救済法を研究せられたのは誠に同情に堪なかつた舎監は勿論職員も一同心配して呉れたが如何とも良案がない然し袖手傍觀は責任上許さぬ處より最後に窮策を講じ休業前縣知事宛にて利水策に關する陳情書を提出したのである實に我校永久の爲め否な現在生の生命問題として血あり涙ある熱誠を吐露した一言一句であつた或は當局に對しては言過激に失したかと思つたが上局の至誠を動かすべく更に強度の熱誠を含めたこと、信じて疑はなかつた果して右の陳情書は賢明なる我上司の洞察する處となり直ちに川邊技手が土木課より調査に來られた次で中村縣屬が學務課より調査に來られた陳情書の効果も亦偉大であつたかゝる重大事件には土木學務合力にあらざれば其目的を達することは不能である技術は教育の外に立たねばならぬ然かも教育上の立場より觀察する力は技術を左右せねばならぬと思ふ實は川邊氏のみ先に來校致されて居たが未だ物足らぬ然し同氏の教に依り急場の難を免るべく臨時の策を實行すべく努めては居たが根本策は學務の同意を得ねばならぬ然るに突然八月八日中村縣屬が來校されたので其日は朝から晩迄限なく關係地を案内し又參考に供して訴へるが如く頼むが如く歎願して根本策を提供したのであつた幸に當日は夏季の休みなるに係はらず舎監事務員等最も前後に關係深き數

行の仕度で例の便利鎌を杖にして歩いて居たのは他人が見て狂氣染て見られはしなかつたかと今より思ふこともある、漸く十時頃には歸宅したが此夜我父の竹馬の友海部大純氏が徳川義怒男爵(侍從職)の家扶であるが當地へ御旅行で岩屋泊りだと云ふ通知に接し直に山仕度を更めて久敷振りに海野氏を訪問した男爵には最早御就眠であるの故を以て御目通り致さず別室に一應の御挨拶を申上げた

所て同氏の話に依ると實は明日一日當地見物の豫定であつたが今夜やんごなき所より電報にて急歸せよとの事故急に明朝一番で篠の井廻りにて歸京御伺候の都合であると申された

日獨交戦の今日となりて考へれば丁度此頃聖上陛下には日光田母澤御用邸に御避暑であらせられたのが時局切迫し歐洲の風雲漸く東洋に波及するの形勢となり御聖慮を腦まさせ給ふ際中であつたこと、恐察し奉るのである男爵閣下も時局かく迄急轉するとは豫想外であつたと見へる一日の清遊を東京より試み給ふたのも御職務柄、陛下の御傍近く侍らせらるゝ必要の如何ともするに由なく再遊を期せられ豫定變更と御決心になつた様子であつた、

そこで自分は明朝福島驛に御送致すべく約束して岩屋旅館を下り歸宅したが今朝からと云ひ今又時局變轉御聖慮の程恐察し

奉りて感慨無量容易に寢に就くことも出来ず神經興奮の状態に入つたのである茲に於て俄かに孤軍奮闘白馬の頂を襲撃すべく豫ての計畫實行は此時なり明朝は徳川男爵一行を御送りしながら明科驛迄の汽車案内を申上げ旅情を慰めんものと決心してかの日露戦争の際露助の分捕品たるランドセル鞆を取出し極めて突嗟の場合輕装に若かずと考へ用意し終りに終り漸く寢についた、翌九日天氣晴朗登山日和大丈夫と見定めたのである先に忠告した山の神様迄此日は心よく登山の門出を送つて呉れた子供も餘り突然のことと丸で出征軍人の非常召集に逢つた風情に感つたのであるが豫定の時刻に例のランドセル鞆を肩にして停車場に飛込んだのである、此の時迄は木會附近の人士は世界の形勢が今日の如く變化するとは誰れも夢想だにしなかつた加ふるに水害前ではあるし例の福嶋一番の捕虜行列車は例に依つて閑静であつた爲めに徳川男爵一行の客車に自分も海部氏の紹介に依り乗合せたのは何よりの幸運であつた停車場には伊藤助役と宿の主人二三の見送人あるのみで御旅行の旅装飾りに人目にも立たない様であつたが流石は、今上陛下の御學友として侍従の高職にあらせらるゝ貴紳士御夫婦の態度には珍竹山人の甚く敬服し奉るの外はないのであつた車中沿道の風景觀名所來歴高山の名稱等御説明申上げたが余りに身

名も小生の立場に對し勢援されたので中村氏も随分御迷惑であつたと今から思ひ浮べ

こで白馬登山の歸りに雨中の岩石採集もや
つて宿に持歸つたのはかの蛇紋岩であつた
がつい／＼水害騒で行衛不明になつたは殘
念である、只石は高山植物と異り道中の重
荷となるから兎に角高山土産としては容易
ならぬ業であるかくてこのかの鑽石採集家
の苦心も察せられるが奇石採集を一種の道
樂とする輩の辛抱も亦味ふ可きであると思
ふ、
汽車は刻々に進みて早や明科驛についた何
んぞなく初対面の男爵閣下に接して得る處
は無いは無が若し此儘東京迄も同行致せ
ば尙一層興味と智識とが修養上賦與せらる
ゝと信じたが自分は自分の豫定に猛進すべ
く茲に懇懇なる別辭を述べ見送りのたので
ある、あゝかゝる貴公子に再び接するの機
會あるや否や山人も山林の清幽には常に飽
足るのであるが人品の崇高なる貴公子に接
觸するの機會に乏しきを嘆ずるのである然
し幸ひ昔の木曾と異つて中央線開通後の今
日なれば絶望にあらざるを喜んで居る。
序に記す家扶海部大純氏歸京後謝狀に添へ
左の詩を送付せらる一片の情緒穿ち得て妙
なり

木曾即事 華 隱 純
水送山迎水又山 鐵條一路不知難
風掠衣袂夏猶冷 身在棧雲溪霧間
全 上
山容水態雨清幽 恨我探尋未及秋

蘇峽紅楓鷺湖月 重來何日續今遊
旭將軍之墓 在興禪寺
從軍不見雙騎回 追憶當時事可哀
寂莫孤墳蕭寺裏 英靈千古鎖莓苔
駒ヶ嶽行の途上 三年 翠 郎 生

葉月の末頃のある朝「駒へ行かう」とい
ふ一語が誰れ云ふとはなしに出て、私ら十
余名の登山行が出来上つた、が然しこの一
語は偶發したり突發したのではない、この
谷間に住んだといふ短からぬ生活のうの明
暮に誰彼の目にも映ト心にも刻まれた、あ
の崇巖な駒の曉の色、あの華麗な駒の夕焼
の彩、峯の錦路の綾、たゞそれからあの男
性的な多角形な連峰のたゞすまる、エィデ
ルワイズとかいふアルプス迄行かねば見ら
れぬ草花、風雨に殖れたといふ悲しい趾、
それらは凡て羅衣の一重下にあるのである
その忘れ難い印象や實物や譯を、只もう直
覺的に率直に、小兒のやうに、足の傍に手の
上に、うして眼前にしたい、といふ仄かふシ
ンブルな心の渴望が凝り固つてこの語をな
したのである、勿論異議のあらう筈なく、
朝風のひやりと我頬を撫でるやうに即決し
出發はその日の正午とした。
人の呼吸に酔ひさうな私らは二つの墜道
をくゞり右に森林鐵道の工事を見て、ガタ
ンと列車は停まつた、これから私らが脚力

を試練すべき時に入つた、駒ヶ嶽山口と
云ふ石標を左に廻り石礮道には入りながら
駒ヶ嶽大神宮の最下の二字に不遜を鳴らした
「怎麼心掛けでは屹度山が荒れて一人や二
人は死ぬ」「誰れが最先だ」などの會話が
前後のスタノ／＼いふ草鞋の歩調の中に聞
た、午後の陽は容赦なくカン／＼と照りつ
け鐔のせまい夏帽は強い光と熱とを受けか
ねて首筋のあたりはヨリ／＼と焼燻でも
あてるやう、しまひにはヒリつき出した、
兎や角うしながら膝栗毛を駆つて、若葉の
さざめく道を辿り、里宮も通り彌宣の家ら
しいあたり桑つみ歌を聞き、潺湲たる流れ
に和して高く謳ひ、裾野といふ氣分をいか
にもよく味はせる十度位な傾斜路を行くと
その兩側には樺林や赤松が覆ひ被さつて小
さな木蔭をつくり梢まばらな雑木を透して
澄みきつた青空の玲瓏珠のやうなのが見へ
それには羊毛のやうな雲さへ一ひら二ひら
見へる、夏の榮を語る緑の草は路を冒して
起きたり臥さつたりしてゐる、木のない草
原路を押しわけて行くときには草のほてり
でムカ／＼と顔と云はす脊と云はす蒸され
て汗が滲む、汗の香!!それは實になつかし
い香である、身を勞役させエキルギーを越
くところ、發露させたまき、身中に溢れ
るものがこれだから、水が漲つて徑を濕し
てゐるところも丸木橋が朽ちて水につかつ
てゐるところもあつた、足は遠慮もなくう

れらを踏んで、ヒヤリとする快い官能を喜
んだ、少し行くと、小川の邊に出た、三十
六の峯に降つた雨、凝つた霧は滴つて八千
の露をなし八千の露の水は集まつてこの流
れをなし、山神が疍癩を起こして荒れ狂ひ
覆盆の雨を風伯に齎せたことが度重つては
兩岸の綠草の領分を侵略してこんな石や岩
のゴロ／＼としてゐる川を形づくつたのだ
らう、三時近い陽を反射する眩い眞白な一
帯は今日では申譯許りにその眞中をチヨロ
／＼と美しい水を流しているの一本橋に
立つた時、駒から吹き下ろした一陣の涼し
い風は千金でも銘の打ちたい程私らの汗
を拂つて去つた、それも後にして行くと、裾
野はもう終らし見くなつて道はだん／＼瓜
先上りでも曲りくねつてくる、頭に結
びつけた頼朝公の目方がだん／＼感づてく
る汗が脊筋を流れるこんな風で少頃行くど
遙かに鞆の音がする、たしかに瀧だ、瀧
の響を聞いて足を早めながら思ひ出したの
は、今春の日光行の時、汗と喘ぎでヤット
身をこころがして行つた時、瀧の響がどんな
に力を與へたかといふことであつた、余程
の期待をもつて走せつけた瀧が「ナーンだ
こんなちツぽけたものか」さしかし一度う
の瀧壺とも稱ふべき潭に手を浸し顔を洗ひ
口嗽ひた時、私らの心の中にはどんなに感
謝の韻が溢れたであらう、二間許り水が直
下してゐるので名は敬神瀧とか、も少しや

さしい名があつて欲しいとも思はれた、
此處からはいよ／＼森林帯に入るるのであ
る、肌の白い白樺のチラ／＼と見ゆる彼方
此方の山を見返りながら、草鞋の紐を締め
た、見上ぐればコバルトの山灰色の山は聳
ね聳ねてあの空を摩してゐる、突兀たる連
峯は誰れが創造したのか駝のやうに幟屏を
してこの谷とあの向ふの谷とを隔て、ゐる
『あの山越へて』とねんね子唄にもあるやう
に、私は思つた、あの山越へた向ふには屹
度綠色な平蕪の野が果しもなくあつて、其
處には銀糸のやうな川が貫いて流れ、豆人
寸馬のゆき／＼に平和の空氣が漲つてゐるに
ちがひない、あの山嶺の一角に立つて、う
の美しい川を想像し、心靜かにうの川を游
ぐ魚の境涯迄も思ひやつたならば奈何に心
の潤々することであらう。日はもう二時、
頂までは二里半、しかも私らの心はもう頂
上の小屋にあつて、足下に雲を見、身体と
眞平な西に落日を眺め、紫金の夕焼を視、
うして東はるか山邊から躍り出る玉兔や
彩雲を思ひ浮べ、九千尺上の一夜ののみ待
つてゐた。世に先ち朝暎を迎へ世に晩れ
て夕陽を送るといふ高山は儘かに先覺者の
姿である、達人の域である、私等はその達
人の頂に上つて大いに達人の氣を禀け、先
覺者を學ばう、
一行は例によつての健脚家某君を先に立
て、一列になり又歩き出した、うして瀧の

鞆の音は次第に幽かに、道は次第に木下
蔭に入り青葉のトンネルへ潜り込んで行く
やうになつた、數歩前の友は足ばかり數歩
後の連は頭ばかり見ゆるやうに道の勾配が
強くなつて、道の左右には人といふ破壊者
をよそにした昔が岩も朽木も倒木も凡てを
包み立木の幹までに纏りくるんでゐた、森
の中の空氣は實に涼しい、そして甘い、そ
れはオゾレが多いからである、鼻に快い香
を送り耳にしとやかな韻が觸れる、それは
森の精が近くに彷徨ふからである。(完)

隨筆

誓程 一千日 (八)

在佛部 高 樋 博

○來れり！此慶報を致すべきの時は今來れり！
三ヶ年以來曠席なりし我長野縣(帝國の脊梁たる而して四隣沃野數百萬町歩を浸
せる三天川の水源として名高き)の専任林
務課長の名を告げ得べき時は來れり！
大正三年九月二十九日は實に吾人の毎に切
望せし、安藤新課長の轉籍が實現せし日な
り、吾人は何故に此重要な位置を今日迄
空しからしめたるかを解するの明なきを遺
憾とせしも今や名課長を得て此の一忠を拭
ひ去るに至れるは諸君と共に慶賀に耐へざ
る所なり
世は支那三千年の古に比すべく治水の大業

は政治の根元たらん今日、本縣の治水策(遠く濃尾遠越の四隣數縣の利害休戚に及ぼす關係絶大なる)も懸て刮目に價するに至らん、請ふ！今後の我施設に注視あらんを！

たる校名に準據して同一視するは慘酷の骨頂とすべきは何人も否む能はざる所なること同時に、目に一丁字を解せざる徒と雖識見の尊貴すべく其企圖の一世を驚倒せしむべき亦決して少からず、思ふに學問の美名に中奪せられしは今は過去の迷夢となり了せ

す候、茲に御禮と共に卑見を陳べ候。十月五日野澤温泉にて草す。

思ひ出の記

茶目公

- 帝國十年毎の出師は天賦の幸！之れ無くば禍或は内に來らん
○米國の愈々富裕なる程我國は無難日米戰爭は我より押し出さずんば起らず
○獨乙一日の軍費三千万圓大砲一發三百圓今迄の出費十六億一人を殺すに三万圓を要す
○我國の青嶋攻撃算盤の持てる戦争は古今東西類例なし大にやるべし
○雨降り地固まる戦後の工業は隆々として起り未曾有の好景氣來らん幸なる哉
○四十一年より十ヶ年の繼續事業其經費一千三百萬圓の掘削工事は千曲河口にあり
○スエズ以東の大工事と誇るも金捨場の大なるは不感服！
○我に此金を掴ませば帝國の中堅永遠に安固なる計を建てん
○眠れる九頭龍も新に一巨頭を戴きて之れから動き出でん
○矢張り人だよ嗚呼人なる哉
○適材の振擡と凡ラクの淘汰とは不斷の掟とせよ(十月六日)



通信

學校便り

○安藤校長榮轉七宮教頭校長に陞任、九月廿六日前期試験を終へ三十日は修業式成績発表の當日なれば誰も彼も朝來鶴首して發表を待ち居りしに實に青天の霹靂とや云は

りて力を致さむ事は本懐なれ共官命止み難き事より説き起し就任日淺しと雖も其間重大の事件に遭遇し而も幸に大過なくして今日に及びしは一に職員及生徒諸君の援助同情の賜なるを感謝し尙幸ひに後任は七宮教

せられ爲めに校友會各部の事業は隆々として振起の觀ありとて其功勞を感謝し次に東原、川口、宮嶋の三氏各級を代表して夫々送別の辭を呈し終れば安藤前校長登壇滿腔の至誠を捧げて感謝の意を表し往を語り來るを説き或は統御其法を得ざりしを謝し更に体育を奨励し時局に對する心得に及び子弟を思ふの情綿々として盡き流石の廣長

梨縣恩賜財產管理課に奉職され特に苗圃の經營には幾多の經驗を有せらるゝ由、西澤先生は明治三十七年駒場農科大學實科を出でられ長野大林區及農林學校等に職を奉じ次で静岡縣立農學校に轉せられ明治四十一年更に我木會山林學校に奉職四十四年縣林務課に轉せられ今回再び我校に復歸せられたる因縁實に淺からずと云ふべし先生は既に多年林務官の職に在り又學校教育の經驗も豊なれば生徒教養上遺憾なからん林先生は十月三日着任、西澤先生は十四日着任夫々新任の挨拶ありたり

寄宿便り

稻の下葉の黄色が深むに従つて狹い木會にも秋が入つて來たりして熟しかけた稻田の周圍には豆が莢を垂れて來た。うろ／＼百性が忙しい様になつて來た。九月の末は生徒の難關試験があるので誰れも彼れも青息であつた仲にはこれを防ぐためか窓からのぞく時は卵の殻で大分奇麗なものであつたが是れも試験がすむと間もなく取かたづけられた。末には校長先生が本縣林務課長に御轉任になり七宮先生が校長に御陸任になられた爲に舎監を辭任された。十月に入つてから月

の冴ゆる晩が多かつた殊に四日の夜は所謂望の月を観る爲舎前の草原に踞し虫の音を下に敷きながら月前に嬉しい集りを催し藝をつくしあつた。月觀のすむ頃炊事委員の幹旋でぬき豆の御馳走が出た九時過て半天水の如き月はいよ／＼冴へて今宵の神秘を叫ぶに似て居た。試験で身体を痛めた所爲か歸着するものが少くない夜な／＼の蟋蟀の啼聲が減つて行く中に秋は益々深入する八日には運動會の筈であつたのが雨の爲めに九日に開かれた朝の内はともすると怪しい雲が出てゐたが後になつて晴れ切れた。見物人も成多かつたれ以前には二三の小學校生徒が參觀に來た事があつた。四日間の實習の中に活動寫眞が來たので疲れきつた体軀をあの町の一段高い場所にある芝居小屋まで運んだりしたからしてゐる中にも毎朝強度の霜が來た。黄葉が紅葉に變つて來たりして日曜毎にわらじ掛で握飯を首にして遠足に出かける者が多くなつた。秋の味が眞に味はれる様になつて來たのである。今日の休み(神嘗祭)にも大分出かける者が多い様だつた。(十七日認む(生))

會員消息

○學校便りにも記載の如く會長安藤先生は今回長野縣林務課長に榮轉せられたるを以

長野縣更級郡立農事講習所技手ニ任ス ○山梨縣蘇峽會、山梨縣に在職の本縣卒業生は同門の情誼を温め結束を堅うせんが爲今回蘇峽會なるものを組織せる由なるが去月廿七日前校長安藤先生私用を以て甲府に行かれ序に管理課を訪問され多數卒業生に面會し驪談を交へられし由其節同會幹事宮川永三氏より安藤先生に贈られし同會名簿を得たれば左に掲ぐ

- 中嶋昌利君(第四回)幸崎惠喜太君(第五回) 島田輝太郎君(第六回)宮川 永三君(第六回) 原田久保作君(第七回)柏澤 國治君(第八回) 前田 正義君(第九回)小羽根安治君(第九回) 西尾 嘉一君(第九回)木下 稗藏君(第九回) 上田彌太郎君(第十回)小林 政基君(第十回) 齋藤 海藏君(第十回)塚 田 大君(第十回) 市岡 新八君(第十回)佐藤 光造君(第十回) 因に脇田義正君は山梨縣西八代郡技手奉職中の處家事上の都合により九月廿七日辭職せられし由尚木下稗藏君は昨年新嘉堡へ赴きしも少しく健康を害し今夏歸朝再び管理課に奉職することなれり

轉勤

○市川豊二君は東京大林區浪江小林區署に轉勤 ○會員三原昇君逝く 會員三原昇君は豫て病氣の處藥石其効なく去月廿一日新潟縣北蒲原郡中條町に於て遠逝の旨同氏殿父より通知ありたり茲に深厚なる哀悼の意を表す

第十四回運動會記事

翠 邨 生

大に肢脚を伸すべかりし新秋九月の二旬日を試験てふ苦闘裡に送り、愈々天澄み氣清らかなる中秋十月を迎ふ、冷涼なる野風は朝に夕に訪れ露さへ千草の葉末に玉なして郊外滿目の秋色遺憾なきに到れり、水は晶明に空は透徹に健兒の軀幹はやうやく肥強に、秋の凡ては活躍を期待せり、而かも時局は南歐に爆烈し全歐に彌蔓し、遂に東洋にまで波及し、茲に神州男兒大活躍を試むるの機會を讓せり爾來躊躇に躊躇を重ねし健兒の意氣はこの好季この時局を俟つて勃發せんば止まざりしが幸に我第十四回運動會あるありて遺憾なく發露するを得たりいでやその顛末を記せむかな。

本月一日以來校友會各部役員を以て運動會に關する打合せ及分擔をなしたの十部を置く即ち、競技、審判、庶務、裝飾、接待、賞與、會報、樂隊、風紀、借物、これ也、各部若干名宛の役員は主となりて連日準備に余念なかりき、その功程各部ともに遺算なく同月七日迄に完成せり、明日こそ運動會よと寝にありても腕をむづつかせつゝ待ちし八日は、憎くや雨なりき、旬余の秋晴こゝに一頓挫し健兒脾肉の嘆を訴ふるや切なりきかくて雨は午後霽れたり、空の一角を睨みて明日こそ明日こそと待つ心には愈

て十月一日校友會にて送別會開催越て四日夜は見晴亭に於て町民の催に係る盛大なる送別會あり五日一番列車にて長野に向はれたるが停車場には山林學校職員生徒一同各官衙員小學校職員本校卒業生、其他有志の見送人にて雜沓せり因に先生は御家族の都合により單身、赴任當分下宿生活を營まらるゝ御都合の由、宿所左の如し

○古根是君は今回新設の宮崎縣西諸縣郡加久藤小林區署へ轉勤 ○山下藤一君は八月卅一日付九級俸に昇給 ○山下常記君は今回多主木小林區署(熊本縣)在勤被命八月卅一日付九級俸に昇給 ○石坂季治君は帝室林野管理局名古屋支局付知出張所に勤務を命ぜらる ○宮田實君は前號記載の通り更級郡技手に榮轉せるが九月十六日付辭令左の通り

々々意氣の昂然たるもの多きを窺知し得たり半宵窓を押し中夜を仰げば暗愴として心許なき秋の空なりし。 明くれば十月九日、駒の山巔に射す紫金の光りに曉天冷かなり、雲行稍不安なりしかども碧空時に望み得氣靜かに風穩かなりき、會場の内外に萬國旗を掲揚せし頃はやうやく晴れて赫焉たる日光雨の如く灑ぎ來れり、刻一刻時長は進みて正九時正氣グラウンドに磅礴して呼吸既に齊へり、同窓百五拾旺んなる談笑たさまりて躍立せり、 さても此の日の會場如何と打見るに先づ眞正面には裝飾部の丹精凝らせし大アーチあり額に龍虎跳の三大文字を載せ飾るに銃器藥莢を以てし高く猛鷹の利爪伸し炯眼屹と蹲るあり神州軍國の意、業に表現せられたるを覺ゆ、歩いて順路、頭上に翻騰たる萬國旗は吹くとしもなき朝風に揺れつゝあり注視すれば獨逸の黑鷲旗一もなし敵愾心はこゝにも鮮かなり。 庭に三株の高き旗竿は帆檣の如く聳ね大綱小綱に萬國旗翻りて宛ら滿艦飾の如し南北隅に菓子林檎等の賣店あり名さへ勇ましき振武亭雄飛軒とは聞へし、時計臺あり樂隊部あり、正面高く繫留せられたるは飛行機國光號なり、見るから軽き單葉式にして鵬となん呼べる大鳥もかくやと思ふばかり也、時局柄として人目を牽くこと多大、又東方の丘上には青嶋に擬せる要塞あり本日最

後の競技に用ふべきもの也、凡てに涉りて時局的色彩の豊かなるは先づ観者を喜ばしめぬ、會長席は紅白幕もて張りし正面にして賞與部會報社これに接せり。一號砲は轟き健兒は踊躍して列に入れり、會長は朗々たる聲もて開會を宣し訓示するところありかくて競技を開始す、此頃既に觀衆あり最寄小學校の生徒は見物席の第一線を固めたり、時計臺の大時計はノソリと長針を動かして九時の音カシと響きて健兒に活躍を命ぜり、風紀部の巡羅は威儀堂々、會報社の賣子は輕裝疾驅、係員は目を廻さんばかりに奔走し初めたり以下順を追ふて競技の種類と重なる優勝者と心附きし三四の批評を記さん

○午前之前部

- 一、フットボール(全生徒)二、二百ヤード
- 三、薪拾 四、英字綴
- 五、韓信股潛甘んじて他人の股下に匍ふも時の是非なれ、但手の皮擦りむきし某は殿となりて一層の氣の毒
- 六、四百ヤードヤード競争は飽くまで男子的也、ヘビの掛け方に掛引あるを知らざるものは敗るゝなれ
- 七、實習服競争一年の大半を托すべき身の鎧なれば手練の早業見ると晴業也、觀る田吾君を啞然たらしむるもの故なしとせず、勝者は矢張り三年生に多し
- 一等 奥村君(二年) 二等 松川君(三年)

三等 田近君(三年)

- 八、觀音競争
- 九、載囊スプーン神經を頭上と手先に分ち使ふは管事にあらざるべし
- 一〇、くじびき
- 一一、障害物行手を沮むものを斬りて進み踏みて排するは強ちに野猪の勇ののみ批難すべきに非ず、况んや敵前行動等に於てをや其平生に負ふ所大なるにや勝者は器械体操のチャン諸子のみ也
- 一等 矢島武六君 二等 千田政美君
- 三等 吉川真夫君
- 一二、三百ヤード 一三、板ばき
- 一四、養老孝子
- 一五、旅裝點燈菅の小笠に足袋脚絆草鞋の紐も締めあへず、提灯に向へどもいづかなくつかばこそ、癩に障りて五六本も軸木使ひしもあり、慌て提灯を燒きしもありき
- 一六、蟹這ひ何の因果か横に向ひて走り競とは滑稽なるもの、一也
- 一七、暗つかみ 一八、二百ヤード
- 一九、盲啞提灯無言者の指導によりて無明者が風強きに點燈せんとするは蓋し難中の難事なり、不具のみなれど持ちつ持たれつ暫時にして勝敗決せり
- 二〇、重荷坂山の力穰海の畧と高呼せし先人もありしとなん、されど金剛力ならぬにこの競技に加はし輩衆所目にも惻

ましかりき

- 二一、猫かぶり 二二、四百ヤード
- 二三、旅裝點燈本校職員 理化の先生は酸素の供給が上手で一等だろ」と誰やらん云ひしかど事實は然らざりし
- 一等 島内先生 二等 征矢野先生
- 三等 北村先生 四等 新家先生
- 五等 林先生
- 二四、食パン競争後手にして吊せしパンを喰へんとするなれば、ボチのチン／＼にさも似たりき
- 二五、騎馬競争
- 二六、膠州灣攻撃盲者が彼岸の旗をこるものにして途上に敷設水雷あり暗礁ありて容易に達せざりき
- 二七、蛙飛び 二八、珠算競争
- 二九、二人三脚 三〇、サツクレース
- 三一、盲啞旗取 三二、薪拾
- 三三、捧倒し全生徒にて揉みに揉みしかど紅白各一勝一敗ありて分れたり
- 斯くて午前の競技を終り各員中食に就けり觀者亦右往し左往して雜沓を極む。
- 午後之前部
- 午餐をした、かに召上りたる健兒諸君は數日來苦思考案の末に仕上げたる假裝大行列に參加せんものと各種の扮装を凝らせり講堂に勢揃をなせし時遂に顔見合せて眼を見張をも理、社會の百面相をとりて而かもその假裝が各人の性格に幾分投合しを發

揮せるが如き觀あるをや、正午を過ぎる半時、樂隊を先登にしてドンチャンと繰出せる一隊の奇觀更に甚し、今りの種類を擧ぐれば

- 負傷兵 白虎隊 薪拾 消防小頭 大工
- 番頭 行商 紳士 炭焼 水道工 夫 劍客 少尉 一寸法師 日雇組 箱根道中 老人 獵師 浦嶋太郎 七福神 書生 農夫 登山人 閻魔 子守女 下駄齒入 布袋 易者 若侍 按摩 雲助 職工 手代 風車賣 號外賣子 桶屋 老人 西洋婦人 田吾作 小學生 饅頭屋 鹿 無僧 辻占賣 紙屑拾 浪士 閑人の紅 葉狩 支那人 無賴漢 乞食 不良學生 カイゼル 僧侶 黒人 登山先達 赤達 摩 山賊 養老孝子 廢兵 柳夫 魚屋 二宮金次郎 ニグロ 醫者 唐人形 芝居屋 法界 朝鮮人 土方 尼僧 消防 纏持(○印を附せしものは出色のものなり) 同一種のも三四位はありき、假裝行列につきて細評は冗漫の嫌あれば陳べし、觀覽者來賓諸氏の投票の結果次の如く當選せり

- 一等 負傷兵 二等 カイゼル
- 三等 薪拾 四等 赤達摩
- 五等 廢兵

各種の色彩と變化とを充實せしめたる一隊は蜿蜒實にグラランドを一周するに足り百有餘名と註せられぬ、三周して消え失せ再び

競技に入れり

- 三四、薪拾
- 三五、來賓旅裝點燈所謂有髯諸氏が若返られ白髮氣味の頭に笠戴き提灯大事と馳せ給ふなれば一層の目を牽くものあり、内藤技師殿の殿は御氣の毒なりき、兎角日本人は老人振りて無邪氣少し時に白髮の翁が幼童と嬉戲するも必要なり
- 三六、猿廻 三七、英字綴
- 三八、五百ヤード
- 一等 種倉隨藏君 二等 丸山嘉一郎君
- 二等 清水徳久君
- 三九、リエージ攻撃武裝儼しくスタートに立ちしは實戦の勇卒を思はしめたり壘は高く道は峻し、然れども競者は勇往邁進、校舍東方の山腹を攀ち山嶺の旗を獲しは勇ましき極みなりき、號砲一發二發……五發の勇士は誰ぞ
- 一等 原貫三君 二等 古畑秋藏君
- 三等 田近善右衛門君 四等 稻葉増吉君
- 五等 千村萬三君
- 四〇、脊面負球
- 四一、小學校生徒遊戯簡素にして且朴訥なる青年者の競技は一面に於ては殺伐なるを免れし、然るに優しきことエンゼルの如き小兒がその真中に現はれて小き手足をあやにしその天真を發揮するは對照妙を得て暫しは恍惚たる心地す

題は「雀」福島小學校尋二の生徒なりき、

余輩はこの催しあるを謝す、幼かりし日は青年にありても壯年にありてもいとなつかしき思出をうゝるなれば

- 四二、暗つかみ
- 四三、六百ヤードマランソンの勇士や章駄天の如きもの漸く頭角を擡げんとせりるの勝者は
- 一等 川崎次郎君 二等 藤枝茂君
- 三等 林 勘次君
- 四四、旅裝點燈
- 四五、聯合軍激戦喊聲と砂塵は原頭數十の兵を包みぬ、劍光發矢と飛びて對者を空竹割にせずんば止まじと獅子奮迅の猛者あり、三尺の大刀を横たへてよき敵にこそぞ待つ勇士あり、火出でん許りの搏撃も遂に紅軍の勝に歸せり
- 四六、郵便配達 四七、バウダ
- 四八、小學校兒童(尋常科)二百碼
- 一着は黒澤校の向井君なりき
- 四九、掃海作業掃海は敵前行動中の至難なる一なりと、さもあるべし眼を隠しして木剣を振り翳し數歩前の空を一撃せんとするなれば遂に勝敗なかりき
- 五〇、卒業生五百ヤード宮下齒科醫君の大鼓腹をさも輕げに運ばれしは見ものなりき、あの肥大なる体軀なればグラウンドに地響させしは更に一層の聴き物なりき、

一等 林先生 二等 狩戸君

三等 宮下君

五二、玉手箱 浦島が龍宮より齎せしられ
とは事かはり浮世百面の變裝競争にして
十三種の風体ありかく申す記者は劍客と
なりて殿を固むるの光榮を擔ひ候

五二、障害物

一等 種倉隨藏君 二等 千田政美君
三等 等々力與八君

五三、騎馬競争

五四、小學校職員四百ヤード
五五、露營の夢 戎衣の袖は露にしとど、
天邊一痕の月好ゆる時、遠き銃聲勇士の
夢を破り、呼集の喇叭響き、起ちて物具
おつとる勇將猛卒の感懷や果して如何こ
の競技時局柄とて山東の一角を僂ばせし
めたり。

五六、本校職員二百ヤード 例によりて驅
幹長大の島内先生は一着なりし

五七、食パン 五八、一人一脚

五九、千二百碼 〓 スタートに現はれしもの
彌次半分と見懸くるとも四十名はあり、
ドサクサに押出せり、三回、四回、やう
やく彌次連を淘汰し、中原の鹿誰が手に
落つるかを知らず、漸くにして大勢決し
健脚家のみ揃ひ、歩聲輕し、十回……最
後のヘビイはかけられ十二回……ゴ
ルに跳り込みし諸子は

一等 今井武雄君 二等 竹原久治君
三等 平田實君 四等 野澤博君

五等 藤枝茂君

六〇、小學校遊戯 六一、養老孝子
此頃は既に雲少く西に傾きし日は烈しく照
り見物席には桃色水色オリブ等のバラッ
ル少からず小さき日蔭を作りたりき
六二、郡内小學校選手競争 〓 朝來福島小學
校席に擁立せられたる優勝旗は誰か校に
落つるやと思ひしに競争の結果再び福校
の兒童に占められたり、他の諸校の奮起
を希望す。

六三、重荷

一等 福嶋 今井君 二等 全 三村君
三等 全 平田君 四等 黒澤 武居君
五等 全 塚本君

六四、盤根錯節

一等 種倉隨藏君 二等 等々力與八君
三等 東原 智君

六五、膠州灣陷落

校の東隅に最初より構
へたりし膠州灣要塞に向つてカーキ色
の實習服を取合せたる攻圍軍は猛烈果敢
の鐵火を浴せつゝ肉迫又肉迫、喊聲天地
を震はんばかり也、今し爆然と破裂し焰
々たる火燼に葬られんする時突進し行く
劍光帽影夕風に閃めきて凄絶たりき、忽
ち起る『帝國萬歲ッ』

緊留せられし飛行機は全速力もて彼方に
飛び天外の飛報は膠州灣陷落を傳へぬ
斯くて多幸なりしこの會を閉すべき時は來
りぬ會長の辭ありて高く校歌を唱ひ萬歲を

三唱しぬ、健兒か堅腕鐵脚は遺憾なく發揮
せられて活躍を擅にせり

秋陽赤く西山に暮き紫紺の暮靄は漸く罩め
望岳臺の號砲に振武雄飛の名にも龍虎跳の
文字にも愧ぢざる底の意氣を示し、霸氣横
溢するを覺わたり、時局は武を八絃に耀か
すべきの時、季節は瘠馬もヒョロ足を踏み
伸すべきの時、而かも人は血氣の蘇校健兒
これより愈体育尙武の道盛ならむことを祈
るものなり(十月十五日記す)

雜報

會員三原昇君死去に付校友會よりは前例
に依り香奠として金壹圓弔詞に添へ奈川村
なる嚴父龜三郎氏宛發送せり
故下畑徳十君弔慰金は先月初に於て募集
を締切り合計金七圓五拾錢は寄附額及芳名
を列記せる帳簿を添へ宮下信一君携帶同氏
嚴父に贈呈せり

安井書記退職慰勞金申込報告 三宅周 吉君
一金 五拾錢
累計拾參圓四拾五錢
林教諭退職慰勞金申込報告 當時在學生齋藤海藏君外
百參拾參名(一名拾錢宛)
一金拾參圓四拾錢
累計六拾參圓七拾五錢
雜誌費領收報告 吉村金 治君
金 五拾圓 山下藤一君

訂正
一、林教諭慰勞金合計九月號に於て「五拾五圓參拾五
錢」とあるは「五拾圓參拾五錢」の誤に付訂正す
二、川崎助手慰勞金合計九月號に於て「拾圓六拾錢」とあ
るは藤卷壽一君の分(三十錢)重出(四月號及六月號)の
爲にて合計「拾圓參拾錢」の誤に付訂正す